

第2回 空白の領域

・第1回 仕切りの構造 (4月号) 第3回 仮説の空間 (10月号)

大切にしたい「もてなしの心」

日本の伝統に学ぶ 21世紀のオフィス文化

縁側に象徴される日本の曖昧空間は
むしろ、正しく仕切るための空白だ



内田 繁氏
デザイナー

1943年、横浜生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。81年、スタジオ80設立。代表作にYOHJI YAMAMOTOの店舗、京都ホテル・ロビー、神戸ファッション美術館、門司港ホテルなどがある。毎日デザイン賞、第1回桑沢賞ほか多数受賞。著書に『インテリアと日本人』『椅子の時代』『日本のインテリア』などがある。



Longleage(ネイルサロン) Nicasa&Partners Inc.

茶室、参道、縁側があることで
人は気持ちの切り替えができる

京都や鎌倉などで古い日本家屋を見たことのある人なら、庭の中に設けられた茶室に気づいたことがあるかもしれません。ただ、お茶を一杯飲むためだけに、わざわざ庭を通り、専用の部屋まで歩いていく手間、それこそが空白の領域なのです。神社やお寺に続く参道も同じのようになります。

伝統的な日本文化において、なぜ、このような空白の領域を大事にしたのか。それは人の気持ちを切り替えるためです。世間という俗なる場所から茶室や神社仏閣などの聖なる場所へ移動する間に雑念を捨てる。そして新たなゼロベースの気持ちで臨むためにはそういったクッション的な空間や時間が必要だと、私たちの先人は考えたのでしょう。

このような文化が日本人全体に深く浸透している証拠として縁側が挙げられます。今でも地方の家に行けばあたりまえのようにある縁側。これ

は実に不思議な空間なのです。

日本における「内」と「外」の区別は、靴を脱ぐかどうかによって明確にされています。しかし縁側というのは、そのどちらでもないのです。靴を履いたまま庭に向かって腰掛けてもいいし、裸足になって上がってもいいし、つまり家の中でも外でもないのです。

そして面白いことに、人々は縁側において決定的な話はしません。主人がここで客人を迎えるとき、そこにはお互いの立場も肩書きもない、お天気の話や最近のできごとなどを話題にしながら、なんとなく核心を探っていく。そこでもし、「ちゃんと話し合う必要がありそうだな」となれば、初めて客人は靴を脱ぎ、家の中に招かれるのです。

こうやって空白の空間や時間によって気持ちを切り替えることにより、よりスムーズに物事を進められる。そんな思想を建築デザインにまで表現しているところが、日本文化の評価すべき点なのです。

日本の伝統に学ぶ
21世紀のオフィス文化

はやわかりメモ

日本の伝統建築では、「内でも外でもない縁側」などの空白の領域をうまく利用してきた。空間と時間の「空白」は、イエス・ノーを先延ばしすることではない、間にクッションを設けることで、なかなかわけられないものを上手に仕切る工夫だ。20世紀は合理化による「無駄」の排除が美徳だったが、21世紀は「空白」などの利用で人間を尊重する時代。オフィスもそれを考えるべき。自然との間を「空白」で仕切れば季節感のあるオフィスができる。ただ物理的に空間をわけるだけでなく、「何を」どうやって仕切るか?」を考えることが、これからのオフィスデザインにおいては重要。

「わからない」のではなく
「わけられない」ものがある

空白の領域は曖昧さにもつながるため、しばしば西洋人からの批判の対象にされました。「日本人はイエス・ノーをはっきりさせないのだから、その本音がわからない」、……こんな比較文化論が昔はたくさんあったのです。

しかし本当にそうなのでしょうか?

考えてみてください。あらゆる物事においてイエス・ノーはそんなに明確に判断できるものではありません。神様じゃないのだから、そんなことに瞬時に答えられるほうがかえっておかしい。日本人は決して、イエス・ノーが判断できないわけではありません。私たちの抱く曖昧さは、それが「わからない」のではなく、「わけられない」といっているのです。

ただ日本人の側でも、この曖昧さを拡大解釈して西洋人の誤解を招くことがあるので、そこはしっかりわけて考えなければなりません。たとえば江戸末期にペリーが来航したとき、「鎖国を続けるか、開国か?」という申し出に対し、時の幕府の役人はさまざまな理由をつけて返答を先延ばしにしました。もしかすると、そのまま時間を稼いで問題をうやむやにしておこうと思ったのかもしれませんが、これが「空白の領域」の正しい理解の仕方とはいえません。まるで、縁側だけあって部屋のない建物のようなものですから。

「空白」はもっと有効に利用されなければいけません。

こんな話を聞いたことがあります。ある大学が離島の生活調査をしたと、村の長に申し込みました。悪い話ではないので受け入れてもいいのですが、村民の中にはさまざまな意見があり、まとまりません。すると長は、人々を集めました。

しかしすぐには議論に入らない。「おまえんとこの娘は元気なのか?」といった世間話が延々と続き、酒の酔いもあって核心にはなかなか到達しないのです。そして数時間後、みんながそろそろ疲れたころになると、村長は「どうだい、調査団を受け入れてみては?」と急に切り出します。宴の打ち解けた空気の中で、その提案は即座に賛成されたのはいうまでもありません。

この場合、村の長の目的は決してイエス・ノーを決めるだけではないのです。村民の中に敵対者をつくらず、和を大事にしたうえで答を出す。そのためには、やはり、空白の時間が必要だったのです。

オフィスの合理化が進みすぎると
人はその中の部品になってしまう

オフィスにおいても「空白の領域」の必要性は無縁ではありません。仕事をスムーズに進めるためには、一見、無駄とも思える空間や時間をクッションとするケースは頻りにあります。

たとえば、営業に行き、いきなり「これを買ってください」なんて切り出す人はいませんよね。最初は天気の話やニュースの話題などを交わし、徐々に核心に触れていく。つまり人間は、ビジネスの世界においても自然に空白の領域を利用しているのです。

ところが、最近のように「オフィスの合理化を進める」といったテーマがお題目のようになると、とたんにそのことを忘れてしまうから不思議です。

本来、オフィスビルにも空白の領域はそれなりに用意されていました。エントランスだったり、エレベーターホールだったり、あるいは低層階の商業エリアなども同じ働きをします。またオフィス内にも、特に使用目的を明確にしなくてもいいような空間があったのです。ところが、合理化によってスペースを極限まで使おうとするあまり、余裕がなくなってしまう。

前号で私は、サンフランシスコにあったファッションメーカー「ESPRIT (エスプリ)」の話をしました。オフィスの一角にカフェがあり、従業員は、朝、出勤すると、まずそこで一杯のコーヒーやお茶を飲んで雑談してから仕事に入る。これなど、まさに縁側と同じ空白の領域です。しかも、私たちより遙かに合理的な精神を持つアメリカ人がこのようなオフィスデザインを採用しているところが非常に面白い。

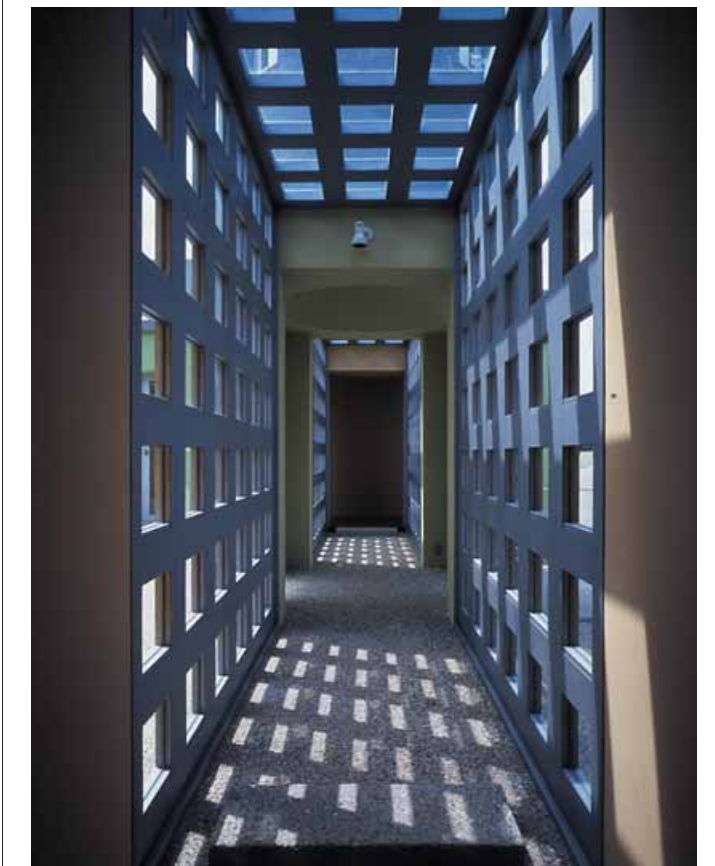
それなのに、日本企業のオフィスでは、依然として必要以上の合理化を進める傾向があるようです。コストの削減という目的から、売上向上に結びつかない部分はどんどん削られていく。そこではワーカーは働く機能を持った一つのモノとしか考えられず、極端なケースでは「最低限、デスクワークのできるスペースを与えればいいだろう」となってしまふ。チャップリンが1930年代の映画『モダン・タイムス』で指摘したような「人間の部品化」を未だに経営課題にしているようでは、本当の意味の生産性向上など実現できないのです。

労働を苦痛にしてしまう執務空間では
どんな対策をしてもストレスが溜まる

機械の部品のように扱われた人間は、大きなストレスを抱えます。そして労働を苦痛とし、とりあえずその時間だけを我慢すればいいと考える。そこには生産性も発展性も生まれません。

「労働は苦痛である」という発想は、実は近代になって定着したものだといわれています。昔、多くの人々が自分で田畑を耕して食糧を得ていた時代には、農民は常に収穫を増やすという達成感を味わいながら仕事をしていましたから、そこには苦痛以上の喜びがありました。これは道具をつくる職人や、ものを売る商人も同じでしょう。

しかし企業社会となった今は、苦痛の代償としてお金を得るのが労働

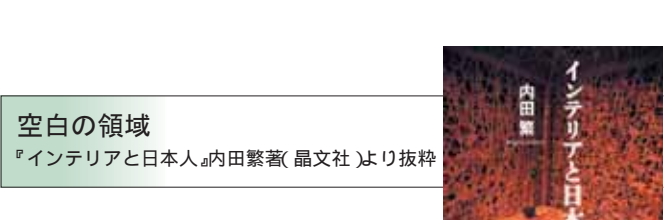


古川邸 ©Nicasa&Partners Inc.

「日本の伝統に学ぶ21世紀のオフィス文化」下記バックナンバーは<http://www.websanko.com>をご覧ください。

空白の領域

縁側に象徴される日本の曖昧空間はむしろ、正しく仕切るための空白だ



<p>日本の空間を特徴づけているものに「空白の領域」という概念がある。「空白の領域」とは、何にも属することのない無縁の空間である。空間とは本来、何かと何かを分離し、それらを仕切り、囲ったものである。何を分離し、何を囲うかは文化の文脈によって異なるのだが、そこには囲われた「内部」と排除された「外部」という二元的構造が生まれる。日本の家が仕切ったものは、死の世界、悪霊、怨霊などの畏怖から呪術的に防御されたものであった。</p> <p>空間を仕切り、囲むということは、いずれにしても内と外という二元論をつくり出す。だが日本の空間概念は、そうした内と外とのあいだにもうひとつの空間、無縁の空間としての「空白の領域」をつくり出したのである。無縁の空間とは、内にも外にも属することのない空間、非A、非Bの空間のことである。この第三の空間としての「空白の領域」という発想こそ、さまざまな場面において日本文化を特徴づけたのである。</p> <p>(中略)</p>	
<p>縁側内と外のフチ</p>	

「空白の領域」は、縁側などの軒下空間にも見出すことができる。母屋から外に向かってつくられる縁側は自然と一体の空間であることから、縁側は内なのかという問題がしばしば論議される。だが、縁側は沓脱の空間でもある。わが国の内部と外部、家と外との規定を示すものは沓脱の場であるかないかによって生まれると、「沓脱の文化」の項で述べた。沓脱の場でもある縁側は実は、第三の空間としての「空白の領域」、無縁の空間なのである。

縁側の縁とはフチを表すものである。内からのフチ、外からのフチである。こうした異なった空間のキワに生まれる縁側というスペースの概念もまた、日本の空間の特性を示すものだろう。松岡正剛は『キワ』とは、空間的、時間的意味を表す『間』である」と述べる。万葉集において「際」を「間に」と読ませ、空間と空間とのあいだに生まれる空間を「際」というイメージで使っていることを指摘している。「波のまにまに」とか「神のまにまに」というように、「間に」は空間的イメージ、時間的イメージが重なり合っている。縁側とは建築的にみれば空間のフチにあたる。しかしこの装置は、空間的にも時間的にも、縁を断ち切る場ではないかと考えられる。

「内」外」という縁を断ち切り、空間の連続性をいったん断ち切ることによってつなげるのである。内と外という二つの世界は異なった世界である。異なったものをつなげるのは、何にも属することのない無縁の空間でなくてはならない。よく家の主人と外の人が縁に坐って親しく会話をしているシーンを見受ける。この場合、家に招いた客でもなく、また外での立ち話でもない・実に絶妙な関係がフチという無縁の場で行われるのである。日本の仕切りの構造は二つの世界を強固に断ち切ることはなかった。空間はそれとなく連続され、それとなく仕切られている。内と外という二つの世界も、縁側というクッションを設けることによって連続されているのである。

ちなみに、縁側のついた建築は格式の高い建築形態である。寝殿造りの内と外ともつかないスペース、鎌倉室町時代の武家造り、そして書院建築など、家の周辺を縁で囲った建築は格式を表している。足利義政の東求堂同仁斎にはじまり、村田珠光のわび茶の茶室にも、村野紹鷗の四畳半茶室にも縁はついていたのである。こうした縁という格式をとっていくのも、茶室の草庵化のひとつだったのである。

「空白の領域」としての縁側は、日本の文化、芸術に大きく貢献することになった。内から外に張り出したスペースは、より自然に近づいた場でもある。自然と深く接触し、ゆっくりとした時の流れのなかで自然と交流する場は、物質を超えた「余情の美」の発見であった。

切りにほかなりません。つまり、地球上はすべて仕切られているのです。住居は外界と生活空間を仕切ることで誕生し、オフィスは仕事空間を仕切ったものにほかならない。したがって、物事を仕切ろうとするのは誰もが自然にすることなのです。

ここで重要なのは、「何を仕切るか？」だけではなく、「どうやって仕切るか？」を考えることでしょう。私は前回の「仕切りの構造」の中で、仕切りには物理的なもの、認識的なもの、空間的なものの3種類があるといいました。この3つをいかに上手に使い分けられるかが、空間デザインにおいて最も大切なのです。

たとえば企業の機密情報を守るためには、最新のセキュリティシステムによる壁、つまり物理的な仕切りが必要でしょう。しかし他の部分も同じ方法でいいのか。部や課を壁で厳格に仕切ったり、オフィスの外と内を完全に分断する構造が本当に有効なのか。それは企業ごとの理念や社風によってちゃんと考えるべきなのです。

仕事空間と非仕事空間の仕切りとして、空白の領域は非常に有効です。ここを通過する間に人々は雑念を捨て、頭の切り替えができますから、結果としてかえって生産性が高まるかもしれません。

現代のオフィスワーカーにとって、仕事の大半は情報交換でしょう。無駄なく情報をやりとりするならメールやファックスで充分なのですから、もしとことんまで空間の合理化を進めるなら、「オフィスなんかなくし、みんなが家にいてネットワークでつながればいい」となってしまいます。

もちろん、ほとんどの人が「それでは仕事にならない」と感覚的にわかっているからこそ、時間をかけてもオフィスに集まったり、他の会社のオフィスを訪れるのでしょう。したがって、オフィスデザインは合理化だけが正しい方向性ではない。物理的に仕切ることが理想のオフィスにはつながらないのです。

デザインにしても、あるいはテクノロジーにしても、あくまで人間のためにあるべきです。人をモノとして扱うために進歩していくではありません。人間不在の発想は、20世紀だから許されたものでしかないのです。

本当に優れたオフィスは、デザインだけが美しいものではありません。何よりも、そこで働いている人たちの表情が輝いていなければならないのです。その明るい雰囲気まで含めて、「いいオフィスだなあ」と思うものを目指してください。

空白の領域に代表されるように、日本人は長い歴史の中で優れた文化を築き上げてきました。その知恵を継承し、後世に伝えていくためにも、いいオフィスが増えれば、こんなうれしいことはない。私たちは何千年もの間、



ルミネッセンス Satoshi Asakawa



Horizontal© Thomas Libiszewski

用を禁止するルールが一般化してくる。つまり20世紀の後半は、空間的にも時間的にも、できるだけ無駄と思われるものを排除しようとしてきたのです。

そしてその傾向が、今でもオフィスデザインの世界では続いている。「内」と「外」を明確に分け、しかも「内」では無駄を生じさせないことが美德だとされる。前号で指摘したオフィスにおける季節感の欠如も、まさにその一つでしょう。

執務空間を壁で仕切り、照明や空調で365日同じ環境に維持する方法は、ワーカーをオフィスの部品と考えるなら有効なように思えます。でもそれは、同時に危険性も併せ持っているのです。

人間は生き物ですから季節によって体調が変化します。たとえば夏（ハル）は「張り（ハリ）」にも通じ、冬の間停滞していた生体の機能が一気に活発になる時期です。その分、身体への負担は高まり、特に肝臓を病みやすいといわれています。「木の芽時は体調を崩しやすい」と昔の人が言い伝えたのは、まさに肝機能の低下に気をつけるという意味なんです。

本来、人間は自然の変化を意識しながら行動しているのです。そんな季節の移り変わりを感じながら自分自身で予防策をとります。伝統的な日本建築において、縁側を初めとする「季節を感じられる空間」を設けていたのは、まさにそのためでしょう。

しかし現在のオフィスの均質性や労働の規則は、どちらかといえば自然と人間を分離する方向に進んでいるように思います。これが「行き過ぎると、身体への負担が高まって病気にかかりやすくなる可能性があります。つまり、「空白」の追放が人間の本来の機能を衰えさせてしまうことさえあるのです。

近代的なビルであっても、自然との触れあいを増やす方法はあると思います。換気の方法を工夫して、もっと外気を探り入れるようにするとかね。ところが、今のようにコストやスペースの合理化ばかりに目が「行ったりすると、なかなか工夫できず、どうしても閉鎖的な構造になってしまうのです。

空白の領域は決して無駄ではありません。うまく活用することで、もっと快適な生活が送れる。オフィスづくりに携わる人は、その点を、もっと考えてほしいですね。

<p>物理的に「何を仕切るか？」ではなく「どうやって仕切るか？」が大事になる</p>	
--	--

人々の歴史は「仕切り」の歴史でもあります。国や町による分割はもちろんそうですし、一人ひとりに名前を付けるのも他人と区別する観念上の仕

「じゃあ、その苦痛を少しでも和らげよう」という発想しか出てこないのです。なぜ労働が辛いものになってしまうのか、根本的な原因を考えていないし、

これ、どこかピントがずれていると思いませんか？　たとえば「ストレスも溜まっているし、運動不足だから走ろう」と、労働で得た貴重なお金をスポーツジムに注ぎ込む。さらに時間がないので、そこまでタクシーで向かう。現在のオフィスの対症療法的な工夫を目にすると、こんな不自然さを感じます。

最近は何かにつけてユニバーサルデザインがもてはやされています。もちろん、バリアフリーの目的からこのような発想を導入するのはいいのですが、オフィスの場合、どうも誤解されて採用されているケースが多いように思うのです。あらゆる空間を多目的で誰でも使えるように構成しようと考えるあまり、最低限必要なスペースしか用意しないケースがある。その結果、働く人のストレスは増えるので、今度はそれを少しでも解消しようと快適な家具や空調でカバーしようとする。そんな付け焼き刃的な対策では、本質的な解決はなかなか難しいものです。

それより、もっと気持ちよく仕事できる環境を最初から実現し、制度なども工夫して、労働を苦痛と感じないようにすればいい。20世紀におけるさまざまな反省に基づいて今後の社会を考えるなら、21世紀にはそういう発想をすべきでしょう。

keyword

ユニバーサルデザインの7つの原則

- どのような人でも使用できる「公平性」
- 多様な目的に柔軟に使用できる「自由度」
- 使用法が明解な「単純性」
- 必要な情報が確実に伝わる「わかりやすさ」
- 事故の危険を未然に防ぐ「安全性」
- 少ない労力で身体的負担が少なく使える「省体力」
- 適切な大きさとスペースによる「使用空間の確保」

<p>徹底的に「空白」を排除した20世紀から「空白」の有効利用を考える21世紀へ</p>	
--	--

快適なオフィス環境をつくるうえで、空白の領域は重要なキーワードになります。一見、無駄だと思えるスペースが、実は人の気持ちをコントロールするために大きな役割を果たすのです。したがって、これからはそのメリットを十分に意識し、オフィスをつくっていくべきでしょう。

20世紀は、とにかく「空白」を潰すことに人類が全力を傾けていた時代でした。たとえばオフィスビルにおいても、昔は地下のスペースは、それほど積極的に利用するものではなかったのです。このため、機械やダクトを設置するか、あまり立地にこだわらない床屋さんなどをテナントに入れるケースが多かった。実際、ちょっと前のビルには必ず床屋さんがありましたよね。

ところが、その後、照明や空調機器などの発達によって地下も有効活用できるようになり、商品価値が高まるに連れて、それまでの空白がどんどん少なくなっています。

話はちょっと横道にそれますが、オフィスビルにおける床屋さんっていうのはけっこう大事な場所だったんです。散髪中に仕事の頭を切り替えることで新しい発想も生まれるし、そこで会った人との交流もできる。それがわかっていたのか、昔の企業では勤務中でも床屋さんに行くぐらいは許されていたのです。

しかし、ビルの地下から床屋がなくなるとともに、勤務時間にそういう私